



被爆73周年原水爆禁止世界大会

核も戦争もない平和な21世紀に!



長崎



8月7日から9日まで開かれた被爆73周年原水爆禁止世界大会・長崎大会は、例年のように女性会議ながさきも実行委員会として参加してきました。

●開会総会

8月7日の開会総会には1700人が集まり、オープニングは純心女子高等学校音楽部。戦争の悲惨さや苦しさを表現した「千羽鶴」などが歌われました。

そして長崎から始まり全国、全世界に広がっている「高校生平和大使」110人が登壇して「ピリヨクだけどもリヨクではない」と日頃の活動を訴えました。核兵器廃絶と平和な世界実現という被爆地の願いを世界に伝えるため、国連(国連軍縮会議)を訪問しています。高校生1万人署名は、2017年8月までに国連へ提出した署名は160万筆を超え、ノーベル平和賞に3年連続ノミネートされています。

昨年、国連で122カ国が賛成して採択された「核兵器禁止条約」は被爆者らの長年の訴えが結実したものです。しかし、安倍政権はこれに反対し、米・トランプ政権の核戦力の強化をめざす新たな核政策を積極的に支持しています。

あいさつした人の多くが、戦争被爆国であるにもかかわらず、核兵器廃絶に後ろ向きな安倍政権への失望を語り、平和や民主主義を破壊し、力の外交を

基本に東北アジアの緊張を高めていると指摘しました。

長崎「被爆体験者訴訟」をたたく原告は「県、市、司法は私たちを救済してほしい。悲しい、苦しい人を二度と作らないでほしい」と訴えました(この訴訟では、国の被爆地域の線引きにより被爆者認定されなかった。第一陣は昨年、最高裁で敗訴)。

最後に女性会議ながさきも登壇し、「原爆許すまじ」などを歌って参加者を送りました。

●女性交流のひろば

大会2日目、長崎ブリックホール国際会議場で開かれ、170人が参加しました。

「私の被爆体験」を女性会議ながさきの森重子さんが話しました。



長崎に落とされたアルトニウム爆弾は非常に危険な放射性物質です。9歳で被爆した私のケロイドは、身体の傷より心の中に残っています。2年前、大学2年生の孫娘がバセドウ病(甲状腺の病気)になったと聞いてショックでした。悪魔の原子爆弾は一瞬で全てを焼きつくし何

十万人もの尊い命を奪い、生き残っても後遺症で苦しめる凶器。被爆者の苦しみは、世界の誰にも味あわせてはならない。平和憲法を守り、がんばっていきましよう。

次は「話芸で学ぶ平和と核」。

田辺一乃さんの講談「第五福竜丸」は、状況が目に浮かび、核の不気味さ、むごさを認識しました。古今亭菊千代さんの落語「戦争の作り方」は、小気味よい調子に引き込まれつつも、平和の本質を学べました。

参加者からは「わかりやすく良かった」「芸人9条の会の活躍を願う」などの反応が。私たちに、楽しみ、笑いながら運動を続けられるたたかさも必要です。

(山崎満喜子)

広島



●女性のひろば

広島大会「女性のひろば」は、2011年の東電福島原発事故以降、「今を知ろう 考えよう」伝えようヒロシマ 忘れまいフクシマ」をテーマに開催しています。

今年8月5日、メルパルク広島で開催され、151人が参加しました。

○被爆者 波田スエ子さん

82歳。当時8歳で4人姉妹の末っ子。爆心地から800mの舟入町の自宅で被爆。両親と3人の姉が被爆死。58歳のとき、「残された時間がない」と思い被爆体験を話し始めた。

突然の閃光、シャーという表現しがたい変な音。その後ズ



ちゃんを置いて逃げたことを責められ、私は幸せになつてはいけなさんだと思った。

15歳のとき、口減らしのため嫁に行った。姑さんはきつい人だったが、お母さんと呼べることがうれしかった。今では子・孫・曾孫など17人家族になった。82歳まで生かしていたで、生きていく証、使命として被爆体験を証言している。いのちを大切に、戦争は絶対反対です。

○渡部美和さん

(福島原発ひろしま訴訟原告団代表)

1975年広島市生まれ。31歳で福島市に移住し、自然農と障がい者介助に携わっていた。2011年1月に男児出産。原発事故後、子どもを連れて自主避難し、現在は広島市の実家で7歳の息子と病氣療養中の夫とともに暮らす。

祖母が入市被爆した被爆3世。生まれた子どもに持病があり、医師に「被爆の影響か」と尋ねると「関係ない」といわれるが納得できない。

出産直後に原発事故が起こり、広島に避難し7年。夫は介護資格を取り就労したが、心を病み複雑性PTSDと診断され療養中。子どもの命を守りたくて広島に避難してきたのに、夫の病気で家族が機能しなくなるとは考えてもいなかった。

福島原発ひろしま訴訟原告団(13世帯33人)の代表をしている。「津波は想定でき、事故は防げた」として、国と東京電力に過失責任を問い、慰謝料などを請求している。費やした時間とエネルギーを考えると焦りもあるが、裁判をやめることはできない。声を上げなければ、原発事故がなかったことになってしまう。原発事故は今も継続中で、日本に生きる全ての人が当事者であることを伝えたいと裁判を続けている。

豪雨災害の時、津波と原発事故がフラッシュバックした。いざという時は避難しようという私と、不安をおおるなという母と争いになった。原発事故の時と同じだ。ただ、違つことがひとつあった。

原発事故の時、国は「直ちに命にかかわるレベルではない。落ち着いて行動するように」と何度も繰り返していた。今回は「命に危険があるレベルです。今すぐ安全な場所に避難してください」と言った。なぜ原発事故の時それができなかったのかと、怒りがわいた。

一度と原爆や原発の放射能で人々のくらしを奪ってはならない。核兵器と原発を止める以外に道はない。

* *

(森容子)

